
仮面ライダーイクス

ten

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーイクス

【Nコード】

N6889J

【作者名】

ten

【あらすじ】

人の心には、必ずなにかしらの闇がある。高校生神矢永司はそれをみつめることになる・・・

Opening(前書き)

オリジナルライダーです！よろしくお願ひします。

Opening

「……畜生！なんで……こんなことになるんだよお！？」

「……いくす……才前八殺ス……」

雨の中、二つの生命が話していた。片方は人間だが……もう片方は異形としかいいようがなかった。

「まだだ……まだ……おわっていない！変身！」

男が叫ぶ……

☆X System Open☆

その電子音とともに、男には、スーツが装着されていく。

イクス「お前らだけは……倒す！！」

☆Fire Mode Unfold☆

スーツに赤い爬虫類のような外見のアーマーが装着され……

イクス「はあああ！」

異形につつこんでいった……

Chapter 1 Encounter (前書き)

書き上げてきづきましたが、文字数がちょうど2010文字です。

Chapter 1 Encounter

小倉「すまん！永司！お前が今日、母親の手伝いするってことは分かって・・・」

永司「うるさい・・・多少だまれ。」

俺は神矢永司。ごくごく普通の神楽高等学校2年。で、この妙のシチュエーションはというと。

永司「だいたい、告白くらい自分でやれ。恥ずかしいからてっだつてくれ、なんていうもんじゃない。」

小倉「だって・・・永司だってわかってるだろ？俺の連敗記録。」
そうだった。こいつは、これまで一度も女子から、好きです、と言われたことがない。

永司「しょうがない・・・やってやるが、その後の責任はもたんぞ？」

小倉「やりいゝさっすが永司君！」

永司「しっかし、なんというか・・・今日は嫌な雨だな・・・」

「ハアハア・・・くそ！ここらへんで危ない気配が！一体何連戦すればいいんだ!？」

雨の中、男はそう悪態をつきながら、走っていた。

目前には、神楽高校があった。

昼休み

小倉「・・・え〜と。俺の名前は小倉隆！っ、っ、っ、付き合ってください!！」

月「ごめんなさい。」

その差、約0.1秒。

永司「ドンマイ・・・小倉。」

俺の親友、小倉隆は、高校生活ちよつと30回目の玉砕を体験した。
小倉「う、うああああん！」

永司「気にするな。この世に女は星の数ほどいるんだ。」

小倉「お前はもう結婚する人が決定してるからいいんだよ！」

永司「有里のことか？あいつは、ただの幼馴染で・・・」

??「あゝ！こんなところにいた！もう！今日は一緒に帰ろうって・・・」

・・・厄介なのが来た。俺の幼馴染の霧島有里。

昔から、俺をやっかいごとにひっぱりこんで、迷惑している。幼少のときは、こいつのせいで鍾乳洞からでれなくなったっけ。

有里「？小倉君もいる。なんかあったの？」

永司「たった今、記念すべき30回目の玉砕を味わったところだ。」

有里「ウワー！おめでとう！」

小倉「お、俺に触るなあ〜」

永司「あいつ・・・奇行に走らなければいいが・・・」

俺は走り去る小倉の後ろ姿をみながら、そう思った。

これが、始まりだとは、露ほどにも思っていなかった。

放課後

有里「結局止まなかったね・・・この雨。」

永司「そうだな・・・ちよつとここで待ってる。小倉もつれてかえる。」

・・・いやな雨だ。小倉のクラスに向かいながらそんなことを考えていた。

なんか起こりそうだな・・・そんなわけないか・・・

永司「おい。小倉いる？一緒に帰ろうぜ」
生徒A「ん？神矢じゃん！小倉なら月と一緒にどこか行ったぞ？」
永司「月と？ありがと。」

旧校舎裏

ハアハアやつと見つけた・・・ったく、月にまだ未練があるのか？
小倉と月が、向かい合ってたっている。

永司「おい！こんな雨の中、何やってんだ？一緒に帰る・・・」

小倉「なんで・・・なんで俺を振った？」

月「だ、だって・・・私、神矢君のほうが好きだから・・・」

・・・やつあたりかよ。なんか負のオーラみたいなの出てるし・・・
「

月「お、小倉君？な、なに？その紫色の光・・・」

ん？あれって、本当に出てるの？

小倉「神矢あ？わかった。そいつを殺せば俺を好きになってくれるんだな？」

・・・は？今、小倉のやつ、妙な発言しなかったか？

途端に小倉は倒れ、その場には、オーラだけが取り残された。

オーラはだんだんその形を変形させ・・・

月「な・・・なに・・・これ・・・」

蔦植物を連想させるような怪人に変貌した・・・

永司「お、小倉・・・なのか？」

怪人はなにも喋らず、俺に背中に無数についた触手を伸ばしてきた。

・・・やばい・・・これって俺死ぬ？

有里も・・・待たせてんだぞ？わけのわからない奴に殺されるなんて・・・あんまりだろ・・・

・・・あれ？

おれが目をあけると、目の前に男が立っていた・・・
??「またハートか？いい加減にしてくれ・・・」

「X System Open」

その電子音と白い光とともに、男をスーツが包んだ・・・そして

「Fire Mode Unfold」

赤い閃光とともに爬虫類のようなアーマーが追加された・・・

永司「これって・・・リアルすぎる夢か？」

俺はそう呟くしか無かった。

イクス「少年・・・ここは危険だ・・・逃げろ・・・」

仮面の男はまだ戦い始めたばかりだというのに、息が荒い。

永司「お、小倉はどうにかしちやったんですか？」

イクス「・・・心配するな・・・彼は救い出すよ・・・」

今は、仮面の男の言葉を信じるしかなかった・・・

永司「わ、分かった・・・」

俺は駆け出した。後ろ目に小倉から出てきた怪人と仮面の男の戦いを見つめながら・・・

イクス「さて、ああいつてしまったが・・・いくら相手が植物だか

らって雨のなかはキツイな・・・」

エイビハート「殺ス！アイテガダレダロウガ、クロス！」

イクス「うわ！危ないな。」

・・・やばいな・・・ここんとこ連戦続きだったから・・・思うように体が・・・

エイビハート「スキアリ！」

その瞬間、触手がイクスの腹を刺し貫いた・・・

すまん・・・少年・・・お前との約束は・・・守れそうに・・・無いな・・・

雨がいつそう激しくなった。

Chapter 1 Encounter (後書き)

次回予告

永司「そんな・・・あの人・・・死んだのか？」

??「もう・・・イクスシステムは失われたのかな？」

エイハート「エイジ・・・オマエヲコロセバ・・・ツキハ・・・」

永司「こいよ・・・お前の闇・・・俺が受け止めてやる！」

hX System Open }

Chapter 2 Change

Chapter 2 Change

翌日

目が覚めた。

(昨日の・・・夢だったのか?)

有里「永司くん！学校いくよ〜?」
窓の外から有里の声がする。

昨日の土砂降りとは正反対の快晴だ。

永司「分かったよ・・・今行くよ・・・」

朝食を食べるために、俺は一階に下りた。

言い忘れていたが、俺の両親は事故で他界した。

(ありえないよな・・・怪人とか・・・へんな仮面の男とか・・・)
不意に電話がなった。

(こんな朝早くに?誰だよ・・・)

『あ、もしもし、神矢君・・・かな?』

永司「先生、なんですか?文化祭の企画書なら、もう提出しましたけど?」

『い、いや・・・そうじゃなくて・・・』

永司「?なんですか?」

『・・・今日、学校休みにします。』

永司「は?今日は祝日でもありませんよね?一体なぜ・・・」

『テレビ・・・つけてみて・・・』

俺は先生の声が震えていることに気がついた。

俺は仕方なくテレビのスイッチを押した

キャスター「ご覧ください!事件があつたここ、神楽高校には、たくさんの人だからできています!」

(・・・なんだ?泥棒でも入つたのか?)

キャスター「殺害されたのは、十位明じゅういめいさん50歳。無職です。」

それと同時に、テレビ画面に十位明なる人物の顔が表示される。その瞬間、俺は手に持っていたリモコンを落とした。無理もない。その顔に俺は見覚えがあった。昨日謎の戦士に変身した男だ。

永司「嘘だろ・・・あの人・・・死んだのか？」

『神矢君？その人と面識あるの？』

俺は、先生の言葉も聞かず、外に出た。そして、自転車で学校に向かった。

神楽高校

警察A「ここは関係者以外立ち入り禁止です。」

ハアハア・・・嘘だ・・・じゃあ、小倉はどうなった？

そつえば、あの人かなり疲れてたようだったな・・・本調子じゃない所を狙われて!?

有里「永司くん！何かすごい事になっちゃったね。あの人一体誰だったんだろ？」

永司「知らない・・・あの人だ何者だったのか・・・小倉も・・・」

有里「？小倉君がどうかしたの？」

永司「え？あ・・・いや・・・何も・・・」

有里「昨日から永司君何かおかしいよ？いきなり私の手引つ張って帰るし・・・今日も私を完全無視して学校にいつちやうし・・・」

永司「あ、ああ。今朝は殺人起こったって聞いたから・・・ちよつと気が動転してな・・・」

有里「ふーん。」

永司「・・・ごめん、有里。少し一人にしといてくれる？」

有里「いいよ！あ！あとで遊びにきてね」小倉君と一緒にね」

永司「ははは・・・」

???

?? A「ハア!? 何、このニュース! 明君が死んだあ!？」

?? B「とても惜しい人材を失くしたわね・・・」

?? A「待つて! 彼が死んだということは・・・イクスシステムは・・・失われたのかな？」

?? B「ハートにとってイクスシステムは一銭の価値もないわ。どつかに捨てられたでしょうね・・・」

?? A「はあ・・・また新しいシステム作るしかないって事ですよね・・・」

どっかの河原

(小倉・・・お前なのか? あの怪物は・・・)

そんなことを考えながら、俺は河原に寝そべっていた。

?? 「ん? おーい! 永司ー! 何やってんだよ」

振り向いた俺は驚愕した。そこには昨日の発端となった小倉がいたから。

小倉「大変なことになったな! 殺人かよ!？」

永司「小倉・・・何も覚えてないのか? 昨日のことか・・・」

小倉「それがさ・・・月様に振られて以来の記憶がねーんだよ・・・」

(本当に、何も覚えていない!?)

次の瞬間、触手が俺に向かって飛んできた。

小倉「!?!? な、何!?!? 今の!?!？」

そこには、紫色のオーラを纏った小倉の姿があった。

永司「な・・・」

小倉は倒れて、昨日の怪人が実体化した

エビイハート「エイジ・・・！オマエヲコロセバ！コロセバア！！」

（やばい・・・これって・・・死ぬ・・・？）

昨日俺を助けてくれた人は死んだ。

もう、俺を助けるひとは・・・誰もいない。

本当に俺を殺すことが小倉の願いなのか？

じゃあ、今までの事は一体なんだった？

そんな時に、俺は川の中にあるものを見た。

怪物の攻撃をかわしながら、そのあるものを拾い上げた。

それは、バツクルだった。

（これは・・・あのとき・・・あの男が使ってた・・・）

俺はこれが、自分の身を守る最終手段だと気付いた。

バツクルを腰にあてると、自動的にベルトが腰に巻かれる。

そして、俺は怪物の方を振り向いた。

「・・・変身」

俺は、バツクルの下部にあるスイッチをはじいた。

「X System Open」

白い閃光が俺を中心に広がりその一つ一つがスーツとなり体についていく。

イクス「こいよ・・・お前の闇、俺が受け止めてやる！」

俺はそばに落ちていた赤いプレート（赤を基調に炎のような紋章が書かれており、中心にFIREと書かれている）を拾い、ベルトに挿入した。

「Fire Mode Unfold」

イクス「来い！」

武器の大剣を手に、怪物へ切りかかっていく。

Eハート「ナンダ!? コイツ・・・コンナニツヨカッタカ?」

俺の攻撃は、怪人に効いてるらしい。

イクス「さつさと・・・小倉を・・・返せ!」

雨が降っていないので、植物を基調とするこのハートには、相当効くのだが、本人は分かかっていなかった。

お構いなしに俺は怪人を切りつけていく。

Eハート「ヤバイ・・・二・・・ニゲ・・・」

イクス「逃げんなあ!」

俺はいったんファイアのプレートを外すと、反対にして、もう一度はめた。

Final Drive Wake Up

(・・・あれ?でたらめにやったら、これで必殺技?)

大剣を炎が徐々に覆っていく。

イクス「はああああ!」

俺は炎の波動を怪人に向かって飛ばした。

怪人は、次の瞬間、爆散し、中から謎の光球が出てきた。

球は、そのまま小倉の中に入っていく。

小倉「ん?また俺記憶が・・・うああ!?どちら様!？」

仕方なく、俺は変身を解除する。

小倉「・・・あ、あれ?・・・え・・・永司?」

妙に気まずい沈黙が、空間を支配した。

Chapter 2 Change (後書き)

早くも二話目かぁ・・・

永司「作者・・・この作品のライダー、最初の変身者、いきなり殺した意味は？」

？かれ、もともとレギュラーにするつもり無かったから？

永司「50台！？50台だからか！？」

次回予告

小倉「なあ、昨日の姿、なんだよ」

ドクン・・・

永司「ツ！？何だ！？今の光景！」

Sハート「クロス！オレカラスベテヲウバツヤツ！」

永司「なんでこんな廃屋に妙なプレートがある？」

〜Electricity Mode Unfold〜

Chapter 3 Darkness of the HEAR

T

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6889j/>

仮面ライダーイクス

2010年10月10日21時57分発行